土と平和　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　豊留　にこ

「あなたが、この世に生まれてきて最初の記憶は何ですか？」

２年前のクリスマス祝会の時、講師の方が私たちに問いかけた言葉がずっと心に残っている。最初の記憶・・・。どんどん辿っていくとある出来事が蘇ってくる。１歳か２歳の私は、父と母に連れられ、公園のベンチに座っていた。暫く経った時、

「お隣いいですか？」

と、ある男の人が私の隣に座った。両親は快く了承したが、私は泣いて拒否をした。それは、彼が背の高いアフリカ系の黒人だったからだ。彼は困ったような悲しいような笑顔を浮かべ、

「sorry…」

と言って去っていった。それが蘇って来た時自分がその時に泣いてしまったことに腹を立て、自分が恥ずかしくなった。彼に謝りたくなった。私のその行動で、間違いなく彼を傷つけてしまったし、少し大袈裟かもしれないが、彼の中の日本や日本人のイメージを変えてしまったかもしれない、と思ったからだ。まだ人生経験が１年か２年しかない当時の私にとって、自分や自分の周りにいる人と肌の色が違う人を目の前にするのは初めてだった。

高校に入学し、私は栃木県那須塩原市にあるアジア学院を訪れた。アジア学院は、主に開発途上国と呼ばれるアジア、アフリカ、太平洋の国々から学生を招き、有機農業や畜産を通し、農村のリーダーを育てる学校だ。宗教も国籍も性別も文化も、勿論肌の色も何もかも違う色々な人がボランティア、職員も合わせ６０人くらいで共に生活をしている。私は、色々な国の人と共に作業をしたり話をしたり出来ることを楽しみにしていた。でも、いざ自分と肌の色が違う人を目の前にすると、２歳の時のあの感覚に戻ってしまう自分がいた。

「結局、あの頃の自分と今の自分は変わっていないのか。」

と、自分に失望した。しかし、そのような気持ちは一旦心の中にしまい、私は彼らと一緒に堆肥を混ぜ、ポットに土を入れ、卵を拭き、野菜を収穫した。作業をしながら、たくさんの人とたくさんのことを話した。それぞれの母国のこと、自分自身のこと、環境問題や貧困問題など、生まれた環境もアジア学院に来た理由も様々で、それぞれ違う背景を抱えている。だからこそ、１０人いれば１０通りの意見が聞けたし、今までは考えもしなかった方向から物事を見つめ直すことが出来る。こうして皆で収穫した野菜たちはそのまま食卓へ上る。そこでも、食べるのと同じくらい口を動かして、夢中になってたくさんの人と話をした。いつの間にか最初の感覚は消え、帰る頃には肌の色なんて一つも気にしなくなっていた。むしろ、肌の色をはじめたくさんの違いがあるからこそ人と関わるのは面白いし、色々な人をもっと知りたいと思うようになった。

　私は、この経験から、人と人を繋ぐのは土に根ざした農業なのではないか、と考えた。土に触れ、土を耕し、種を蒔き、収穫の喜びを分かち合う。そうして自分たちの生命の糧を育て、繋いでいく。こういった本来の農業は人間の根本的な農耕の起源であり、人間のルーツだと思う。　しかし、ここ数年の農業はどうだろうか。機械化が進み、効率重視になり、人が直接土に触れることも少なくなり、色々な人と農作業をしながら汗を流すこともなくなった。収穫したものを自分たちの食卓で一緒に食べることも減ってしまった。如何に手間を省くかを求め過ぎた結果、誰かと作業をするという大切な時間までもが省かれていってしまったと思う。そうするとそこから生まれる人間関係や、人とのコミュニケーションを築ける機会も失われてしまう。だからこそ、私は人間のルーツである本来の農業の在り方を大切にしていきたい。アジア学院のように、色々な人と土に触れ、共に働き、共に語り合い、共に生きる、そんな生き方を追い求めていくと、今、失われかけている本来の人間のあるべき姿に近づくのではないかと思う。このことに気が付いた人が一人でも多く増えると、世界は平和に一歩近づくと思う。こうして、これからも平和への近道をたくさん私のできる範囲の中で探していきたいと思う。

こんなことを思いながら、女子寮の前の畑に豆を植えた。無事芽が出て、収穫の喜びを誰かと分かち合えますように、と願いを込めて。